

現代語「ばかり」の諸用法

一用法分化と用例分布の特徴一

朱琳 (北京科技大学)

要旨

本稿は、現代語「ばかり」の用法分化の条件と用例分布の特徴を明らかにしたものである。本稿では、「スキヤニング考察」という概念を用い、スキヤニング考察の結果と過程に注目する。そして、従来のように、予め「とりたて」「程度」「アスペクト的用法」の三つに分類する方法を避け、各品詞に後接する「ばかり」をそれぞれ観察した。スキヤニング考察の具体的なプロセスについて課題設定の条件を明示しながら検討し、統一的な観点から「ばかり」の諸用法の新たな分類を提案した。その結果、「ばかり」の基本的な用法として、複数性明示用法、数量指示用法、高程度指示用法、時間関係明示用法を挙げ、それ以外に派生的な用法の「ばかりか」と「とばかり」の用法を位置づけた。また、各用法の相違と連続性を明らかにした。さらに、「ばかり」の各用法の文中での分布の特徴と偏りを明らかにした。

1. はじめに

現代日本語の助詞「ばかり」には多様な意味や用法がある。構文上では、名詞、動詞、形容詞、副詞、助詞など多種類の成分と共起でき、その表す意味も、限定、比況、程度、直後など多岐に渡っている。「ばかり」は、伝統的な国語学の背景を持つ研究では、副助詞として扱われてきたが、近年限定のとりたて助詞とする研究が盛んに進んでいる。先行研究をまとめてみると、「ばかり」には、とりたて用法(例1: 雨ばかり降る)、アスペクト的用法(例2: 引越してきたばかりだ)、程度用法(例3: リンゴを三つばかり買う)の三つの用法がある。しかし、「ばかり」には大別された三つの用法以外に、「ばかりに」「ばかりか」など派生的な用法も多い。

また、現実には三つの用法の明確な区分は困難であるが、とりたて以外の用法も広く用いられている。同形態である以上、日本語文法上の合理的な説明が必要である。学習者への説明においても、用法の分化のしくみを明らかにする統一的な枠組みが必要である。よって、本稿では「ばかり」の用法をすべて見ることにする。「ばかり」のあらゆる用法を記述説明するため、一貫した研究方法を探る。

2. 研究方法

数多くの先行研究の中で、様々な研究方法が用いられている。その中で興味深いのは、定延(2001)(2003)で用いられる探索という心身行動に着目する認知主義的アプローチである。定延(2001)では、「ばかり」のいわゆるとりたて用法についてこの説明を行っている。また、澤田(2007)では、定延(2001)の探索の定義と同じ立場をとりつつ、走査という概念を使用し、「ばかり」のいわゆるアスペクト的用法について分析を行った。筆者は、定延(2001)で「探索」、澤田(2007)で「走査」とされる認知的な観察行動が、「ばかり」のあらゆる用法で行われている、また、この発話者や聞き手による観察行動の違いによって、「ばかり」がなぜ

異なる用法を表すかについて説明がつく、と考えている。したがって、本稿では、定延（2001）の探索と澤田（2007）の走査を基盤的な考え方として採用し、一用法に対してのみ使われている探索や連続走査という名称を避け、「ばかり」全体に適用可能な概念として区別するために、「スキニング考察」という新しい名称を設定する。「ばかり」のあらゆる用法を新しく分類し、新しく分類した各用法の相違点や連続性を探りたい。また、どのような条件下で「ばかり」の各用法が実現されるかという基準を探りたい。

また、定延（2001）（2003）や澤田（2007）では、探索／走査を行う時の客観的な課題の設定条件を明らかにしていない。双方とも、人間の心身行動の観点から、自然に導かれるものとして記述説明している。本稿では、「スキニング考察」によって、「ばかり」のあらゆる用法を研究し、分類することを目指すので、その前提となる課題の設定条件も明示しながら論じていく。

3. 考察

分析対象は、『新潮文庫 100 冊』（CD-ROM 版）から、昭和元年以前に出版された小説のデータを除き、昭和時代以降の用例を中心とする。

3.1 「名詞（句）」に下接する「ばかり」

「ばかり」の全 6236 用例のうち、「名詞（句）＋ばかり」の用例は 3286 例見られた。「名詞（句）＋ばかり」の用例は全用例の半数を超え、圧倒的に多い。その中で、「ばかり」の用法には二種類が見られた。まず、その一類は、例（4）（5）のようなものである。

（4）貴僧、申せば何でも出来ましようと思ひますけれども、この人の病ばかりはお医者の手でもあの水でも復りませなんだ。（泉鏡花『高野聖』）

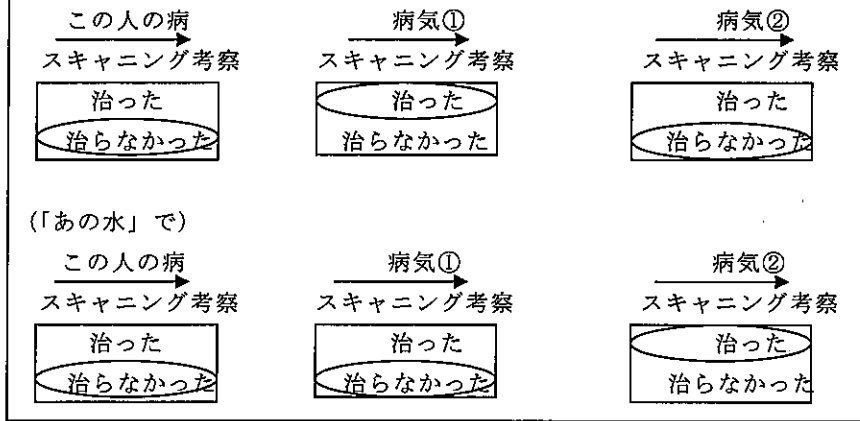
（5）尼さんばかりが寄って、幾月も雪のなかでなにをしてるんだらうね。（川端康成『雪国』）

例（4）では、「ばかり」は「この人の病」に下接している。まず、発話者はまだ、「お医者の手」「あの水」で治せる病を知らないと仮定しよう。例（4）を言うためには、発話者は一連の観察行動を取らなければいけない。つまり、以下のようなものである。まず、「お医者の手」で治せない病を探す。その結果、「この人の病」は治らなかつた、病気①は治つた、病気②は治らなかつたなどである。それから、「あの水」で治せない病を探す。その結果、「この人の病」は治らなかつた、病気①は治らなかつた、病気②は治つたなどである。したがって、何回も観察し、「この人の病」だけが「お医者の手」でも「あの水」でも治らなかつたことがわかつた、というような認知処理と考えられる。

本稿では、以上のような一連の観察行動をスキニング考察とする。一回の観察は一回のスキニング考察とし、一回のスキニング考察の領域は上接語句によって得られる「病」である。スキニング考察の課題は「お医者の手でもあの水でも治（復）らない病気はどの病気か」となる。これは、上接語句と主節述語によって設定されるものである。また、「ばかり」による全体のスキニング考察の領域は各スキニング考察を含む集合であると考えられる。これは以下の図で表示できる。

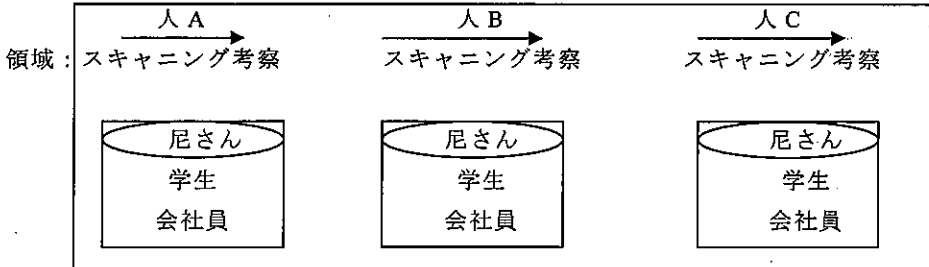
図1 課題：お医者の手でもあの水でも治（復）らない病気はどの病気か

領域：（「お医者の手」で）



例（5）では、「ばかり」の上接する語句は「尼さん」である。「ばかり」によるスキヤニング考察は、例（4）と同じように、以下の図で表示できる。

図2 課題：寄ってくる人たちはどんな人か



例（4）と例（5）の共通点は、スキヤニング考察が複数回行われていることと、その全体の帰結が「ばかり」の上接する語句にたどり着くことである。したがって、「ばかり」のこの用法を「ばかり」の複数性明示用法とする。また、結論を先取りすれば、この明示された「ばかり」の複数性は「ばかり」の本質だと考えられる。

一方、名詞句に下接する「ばかり」には、以下のような全く異なる用法もある。

（6）二人は気ながに待つよりほかはなかったので、ゆっくり弁当を食べていると上り列車が入って来て、三十人ばかりの下車客がプラットフォームに降りて来た。（井伏鱒二『黒い雨』）

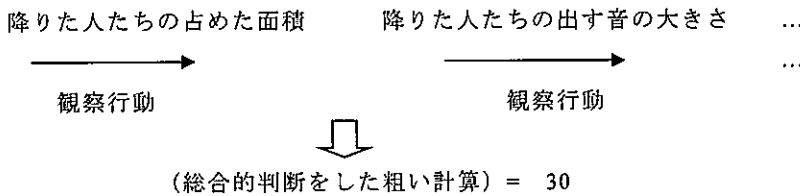
（7）私は二枚ばかりの単衣を風呂敷に包むと、それを帯の上に背負って、それこそ飄然と、誰にも沈黙って下宿を出てしまった。（林芙美子『放浪記』）

（8）傍の粗朶の束に乗せられて、三歳ばかりの女の子が無心に毛糸の玉を持っていた。（川端康成『雪国』）

例（6～8）では、「ばかり」の上接する語句はすべて数量を表す語句である。例（6）では、「ばかり」の上接する語句は「三十人」である。例（6）を言うためには、発話者による降り

た人の数を数える認知行動が必須だろう。この一連の観察行動は素早く粗く行われるものである。複数回観察し、降りた人たちの占めた面積なども含め、総合的判断をした結果、「三十人」にたどり着く。言い換えれば、1+1を30回足し算する単純な計算ではなく、降りた人たちの状態を見るなどの総合的判断をした結果の粗い計算である。これは以下の図で表示できる。

図3

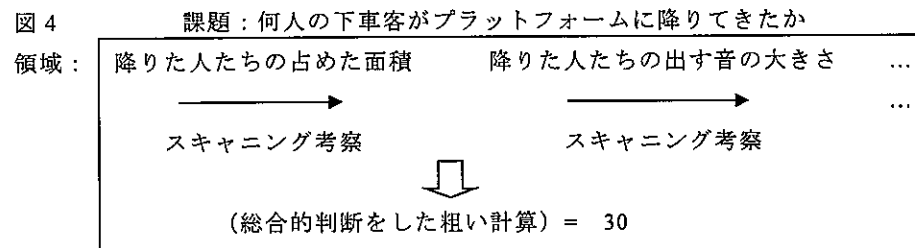


実際に降りた人の数は29人あるいは31人である可能性もある。しかし、一瞬で粗く行った計算では、精確な数字を算出するのは不可能である。すなわち、30人という大まかで区切りのいい数量しか算出できない。ほかの例文も精査した結果、「ばかり」の上接する語句が数量表現の場合、区切りのいい数量表現でなければならないことがわかった。

しかし、例(7)では、粗い計算をしたものの、実際の枚数は確かに「ばかり」の上接する語句の「二枚」である。「単衣」は一枚でも、三枚でもなく、「二枚」である。つまり、「二枚」は概数ではなく、実際の枚数である。この場合の「ばかり」は実際の数量を指示している。

例(8)では、「ばかり」の上接する語句は「三歳」である。例(8)を言うために、発話者は女の子を観察する必要がある。しかし、この観察行動は、例(6)(7)で行われてきたような観察行動とは相当異なる。観察しながら計算しているわけではない。ただ女の子の外見や背丈などを見て、総合的判断をし、「三歳」にたどり着く。総合的判断をするには、女の子の外見や、背丈、仕草などの点から複数回観察する必要がある。この点では、例(6)(7)と同じように、複数回観察を行った結果、「ばかり」の上接する語句にたどり着く。

例(7)からわかるように、「ばかり」は実際の値に一致する数量を指示することもある。概数量や程度が本質とは言えない。また、例(8)からわかるように、「ばかり」は必ずしも計算を行っているわけではない。一方、例(6~8)の共通点は、複数回観察を行った結果、「ばかり」の上接する語句の数量表現にたどり着くことである。したがって、本稿では、以上のような「ばかり」の用法の共通性に注目して、この用法を数量指示用法とする。よって、例(6)では、「ばかり」によるスキニング考察は以下の図で表示できる。



また、以上述べたように、例(6~8)では、課題「何人/枚/歳+主節述語+か」を解くた

めに、スキヤニング考察を行ったことがわかる。つまり、例(4)(5)と同じように、課題は「ばかり」の上接語句と主節述語で決められている。また、スキヤニング考察の領域は個々スキヤニング考察(デキゴト)の集合である。スキヤニング考察は複数回行われ、それと同時に、総合的判断と荒い計算もしている。

「名詞(句)+ばかり」は、「ばかり」句の文中での位置(下接する要素)によって、六つのパターンに分けられる。それぞれのパターンについて、用法ごとの用例数を表1に示した。「ばかり」の用法に強い偏りがあることがわかった。

表1 「名詞(句)+ばかり」の用例の分布

単位: 例

	複数性明示用法	数量指示用法	合計
ばかり+は/が/も	237(88.8%)	30(11.2%)	267
ばかり+の	96(29.4%)	231(70.6%)	327
ばかり+で	646(85.9%)	106(14.1%)	752
ばかり+か	123(100%)	0	123
ばかり+だ	504(96.9%)	16(3.1%)	520
ばかり+述語	877(67.6%)	420(32.4%)	1297
合計	2484	802	3286

3.2 「動詞(句)」に下接する「ばかり」

「ばかり」の全6236用例のうち、「動詞(句)+ばかり」の用例は2431例見られた。その中で、「ばかり」の用法は、複数性明示用法以外に、二種類が見られた。

一つ目は、デキゴトの時間関係を示す(9~11)のような例である。

(9) おまえは、いまきたばかりだ。たぶんこれから土地のこともわかってくるだろうよ。(スタインベック『怒りの葡萄』)

(10) つぎに試みに、死体の発見された二十一日朝の六時半ごろを見ると、列車は岩手県の一戸駅を発車したばかりであった。(松本清張『点と線』)

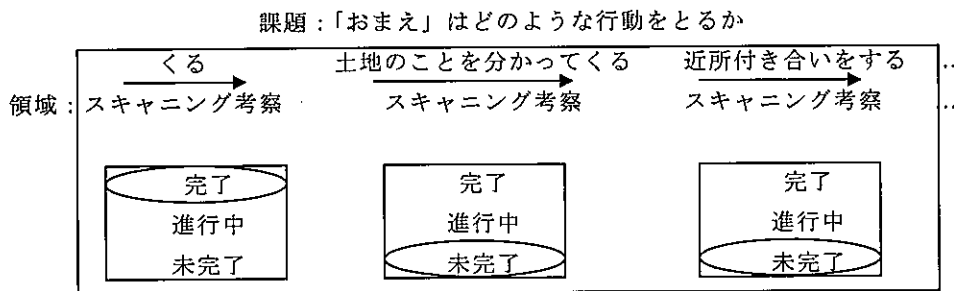
(11) 基一郎はそこに歩いていって署名をし、それで参内はおしまいなのであった。もうあとは帰るばかりなのであった。(北杜夫『楡家の人びと』)

例(9)では、「ばかり」は動詞、つまり、デキゴト「きた」に下接している。まず、発話者が動作主「おまえ」の行動がどうだったかを知らないと仮定しよう。発話者が例(9)を言うためには、動作主「おまえ」を行動の面から観察する必要がある。まず、動作主「おまえ」が「きた」という眼前で把握した事態を観察できる。デキゴト「くる」は完了の状態である。次に、同じく事態のレベルで観察行動を続けると、考えられるほかのデキゴト、例えば「土地のことを分かってくる」にたどり着く。デキゴト「土地のことを分かってくる」は発話時点では、未完了の状態である。その次に、考えられるほかのデキゴト、例えば「近所付き合いをする」にたどり着く。デキゴト「近所付き合いをする」も未完了の状態である。動作主がすでに起こしたデキゴトと、考えられるほかのデキゴトは、発話者にとって、実際に起こると想定された

デキゴトなので、すべてのデキゴトが時間軸に起こる順番で並んでいる。また、一回一回の観察の領域である各デキゴトは、一つの集合をなし、各要素（デキゴト）は集合の中に時間的前後関係で位置している。

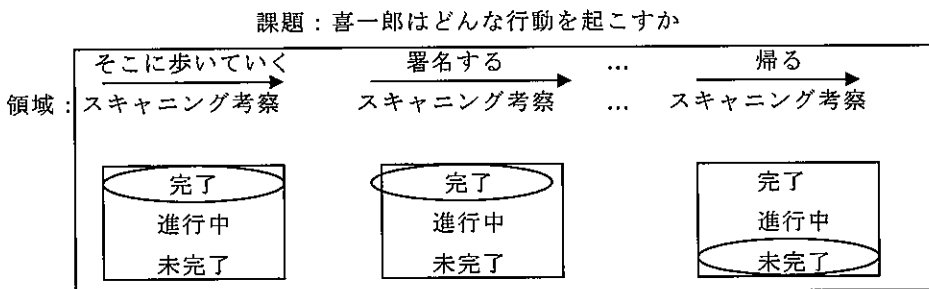
また、各デキゴトを見る時、デキゴトについてそれぞれ時間的展開の様相の集合（中に「完了、進行中、未完了」などの要素がある）から、「完了」（一つ目のデキゴト）と「未完了」（その後のデキゴト）を選んでみる。したがって、例（9）では、複数要素からなる集合を前提としたスキヤニング考察が行われていると言えるだろう。複数回スキヤニング考察をし、たどり着いた帰結は、デキゴト「くる」のみが完了し、その後のデキゴトはすべて未完了の状態だということである。よって、「ばかり」の上接する語句のデキゴト「きた」はタ形で表されている。例（9）でのスキヤニング考察は以下のように図示できる。

図5



例（11）では、例（9）と同じように、発話者が課題「基一郎がどんな行動を起こすか」を解くために、話題の人物「基一郎」の行動を観察する。まず、デキゴト「基一郎はそこに歩いていく」にたどり着く。デキゴト「基一郎はそこに歩いていく」は完了の状態である。次に、デキゴト「喜一郎は署名する」にたどり着く。デキゴト「喜一郎は署名する」も完了の状態である。...最後に、デキゴト「帰る」にたどり着く。デキゴト「帰る」は未完了の状態である。すべてのデキゴトは、時間軸に起こる順番で並んでいる。また、各デキゴトは、一つの集合をなし、各要素（デキゴト）は集合の中に時間的前後関係で位置している。つまり、複数回スキヤニング考察をし、たどり着いた帰結は、デキゴト「帰る」のみが未完了の状態で、そのほかのデキゴトはすべて完了した状態だということである。よって、「ばかり」の上接する語句のデキゴト「帰る」はル形で表されている。以下のように図示できる。

図6



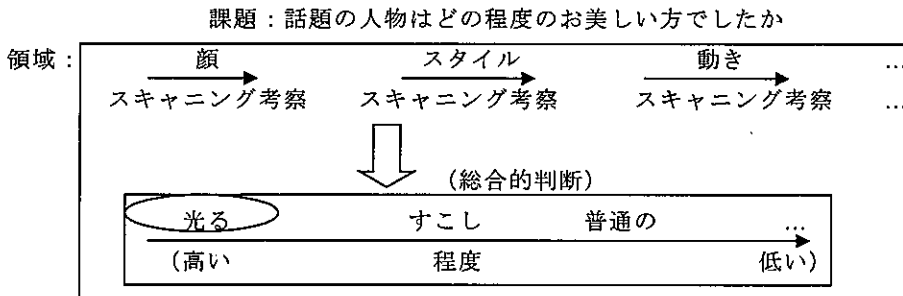
また、例（9～11）では、スキヤニング考察の過程はそれぞれ少し異なるが、「ばかり」による全体のスキヤニング考察の帰結は同じである。つまり、「ばかり」の上接する語句のデキゴトのみが完了（例9、10）／未完了（例11）の状態、ほかのデキゴトがすべて未完了／完了の状態だということである。発話時に「ばかり」の上接する語句のデキゴトが完了して間もない場合（例9）でも、文中で記した時刻に「ばかり」の上接する語句のデキゴトが完了し、発話時には完了の直後ではない場合（例10）でも、発話時に「ばかり」の上接する語句のデキゴトが唯一未完了の場合（例11）でも、スキヤニング考察の結果は、「ばかり」の上接する語句のデキゴトとほかの考えられるデキゴトが時間的前後関係にあるということでは一致している。したがって、例（9～11）のような「ばかり」の用法を「ばかり」の時間関係明示用法とする。例（9）（10）では、「ばかり」の上接する語句のデキゴトが唯一完了状態であるため、「ばかり」の上接する語句、つまり動詞は「タ形」となる。例（11）では、「ばかり」の上接する語句のデキゴトが唯一未完了の状態であるため、「ばかり」の上接する語句、つまり動詞は「ル形」となる。

一方、以下のような全く異なる用例も見られる。

（12）噂どおり、光るばかりのお美しい方でした。（田辺聖子『新源氏物語』）

例（12）では、「ばかり」の上接する語句は「光る」である。「光る」は「お美しい方」を修飾する語句であるが、人間は光ることができないので、「光る」は実際のデキゴトを表すのではなく、美しさの程度を表していると言えるだろう。発話者は例（12）を言うために、話題の人物を観察しなければならぬ。顔や、スタイル、動きなどを素早く観察し、それから総合的判断をし、「光る」という帰結にたどり着く。一回一回のスキヤニング考察の領域は話題の人物の各部分である。つまり、顔やスタイルなどである。スキヤニング考察をしながら、総合的判断をし、最後に人の美しさを表す集合の中から程度として「光る」という動詞を選んでいく。また、人の美しさを表す集合の中に存在しうる要素は程度を表す語句だと考えられる。よって、集合の中の各要素は程度の高低により位置している。また、「光る」は最も高い程度である。この「ばかり」の用法は高程度指示用法である。例（12）でのスキヤニング考察は以下のように図示できる。

図7



「動詞（句）＋ばかり」は、「ばかり」の上接する動詞の形の違いによって、三つのパター

ンに分けられる。それぞれのパターンについて、用法ごと、さらに文中位置（下接要素）ごとの用例数を表2に示した。

表2 「動詞（句）＋ばかり」の用例の分布

単位：例

		複数性明示	高程度指示	時間関係明示	合計
タ形	ばかりだ	9	5	207	221
	ばかりで	68	4	117	189
	ばかりの	0	0	347	347
	ばかりに	0	27	0	27
	ばかりか	61	0	0	61
	ばかり＋述語	13	4	0	17
	合計	151	40	671	862
テ形	ているばかり	97	0	0	97
	てばかりいる	129	0	0	129
	ばかりで（は）なく	20	0	0	20
	ばかりか	11	0	0	11
	合計	257	0	0	257
ル形	ばかりだ	383	26	82	491
	ばかりで	207	8	37	252
	ばかりの	12	115	38	165
	ばかりに	3	136	77	216
	ばかりか	78	0	0	78
	ばかり＋述語	21	76	6	103
	ばかりが	7	0	0	7
	合計	711	360	240	1311
合計		1119	401	911	2431

3.3 「形容詞／形容動詞／副詞など」に下接する「ばかり」

「形容詞＋ばかり」の用例では、「ばかり」の高程度指示用法と複数性明示用法が見られる。

(13) 灯明りの影で筋肉の一つ一つが隈どりされ、胸の谷を体毛がうずめて、すさまじいばかりの巨漢である。(司馬遼太郎『国盗り物語』)——高程度指示用法

(14) 大売出しの景気付けの音楽が聞えていた。やかましいばかりで何の面白味もない音楽だった。(石川達三『青春の蹉跎』)——複数性明示用法

「形容動詞＋ばかり」の用例では、「ばかり」の数量指示用法、高程度指示用法と複数性明示用法が見られる。「副詞＋ばかり」の用例では、「ばかり」の数量指示用法が見られる。

(15) 白布に包まれた棺が唐門を出るとき、曇った空一杯の雲がわずかばかり割れて陽がさし

てきた。(水上勉『雁の寺・越前竹人形』)——数量指示用法

(16) 馬鹿正直なメビウスの輪も、そんなことはすっかり承知のうえで、ただ精神的強姦がいやなばかりに、せつせと空き家の呼び鈴を押しつづけていたのだろう。(安部公房『砂の女』)

——高程度指示用法

(17) 腹がいっぱいになると、悲観的にばかり事態を受け取っていることが馬鹿らしくなってきた。(沢木耕太郎『一瞬の夏』)——複数性明示用法

(18) まだ本当に大人になってはいないのだ。その幼稚さを、江藤はすこしばかり扱いにくく思った。(石川達三『青春の蹉跎』)——数量指示用法

また、「形容詞＋ばかり」と「形容動詞＋ばかり」の用例では、「ばかり」の用法がどの用法であるか一義的に決められない例文が見られる。それは、「ばかり」の上接する語句に、複数の意味解釈ができることによると考えられる。

(19) 源氏の心あたりの邸は住む人もないままに留守居役だけが守っている。門の内は、ゆくほどに木立が深く物古りて、気味わるいばかりである。(田辺聖子『新源氏物語』)

このような曖昧例は「形容詞＋ばかり」の例文に一番多く見られる。これは、「ばかり」が上接する形容詞に、属性的意味と情意的意味の両方に解釈できるものが多いからだと考えられる。

3.4 「とばかり」と「ばかりか」

「ばかり」の用例には、定型表現として「ばかりか」「とばかり」という形式が見られる。まず、「ばかりか」は、文中での位置、「ばかり」の意味など数多くの類似点のある「ばかり＋で(は)なく」とは異なり、「ばかり」が「だけ」に置き換えられない。言い換えれば、「ばかりか」は、すでに「ばかり」とは、異なる定型の、別の語彙項目になっていると考えられる。本稿では、「ばかりか」を「ばかり」から派生した表現として扱うが、「ばかりか」の用例では、「ばかり」の上接する語句の属性、文中での意味などに関係なく、例(20)のように必ず複数性明示用法になる点が指摘できる。

(20) このようなことは可能なばかりか、いますでに起っているのだ。(レイチェル・カーソン『沈黙の春』)

「とばかり」の用法は、「動詞タ形＋ばかり」「動詞ル形＋ばかり」「形容詞＋ばかり」「副詞＋ばかり」など多くの種類の品詞に下接する「ばかり」の用例に見られるが、その数はごくわずかである。「動詞タ形＋ばかり」に19例、「動詞ル形＋ばかり」に15例など、極めて少ない。また、「副詞＋ばかり」の場合、「はつとばかり」「わつとばかり」などの用例が多く見られ、「ばかり」の上接する語句は定型化、語彙化しているとも言える。したがって、本稿では、「とばかり」を「ばかり」から派生した表現と位置づける。ただし、「とばかり」での「ばかり」の用法には、諸用法の連続性も見出される。例(21)では動詞ル形(厳密には現在時制固

定の命令文の引用)に「とばかり」が接続している。「さあお話しなさい」というセリフが最もあてはまるような程度を示す高程度指示用法としても、当該のセリフが今にも実現しようとしている状態をさす点で時間関係明示用法としても解釈でき、両用法の連続性を示していると考えられる。

(21) 例の鋭い眼力でひとわり彼女を観察してから、さあお話しなさいとばかり椅子のなかで眼を細め、両手の指先をつき合せて待ちかまえた。(コナン・ドイル『シャーロック・ホームズの冒険』)

4 結論と今後の課題

4.1 用法分化の条件と連続性

本稿では、「ばかり」の用法を、スキヤニング考察の過程や結果の違いによって、改めて、複数性明示用法、数量指示用法、高程度指示用法、時間関係明示用法の四つの用法に分けた。

- 「ばかり」の上接する語句はスキヤニング考察の帰結である。
- スキヤニング考察の帰結、すなわち上接語句の性質によって、各用法は次のように分化する。
 - スキヤニング考察が複数回行われ、そこから得られた帰結が「ばかり」の上接する語句である。複数回のスキヤニング考察の結果の一致が強調される。この場合、「ばかり」の用法は複数性明示用法である。
 - スキヤニング考察が複数回行われ、その過程で粗い計算、または総合的判断をし、そこから得られた帰結が「ばかり」の上接する語句である。この場合、「ばかり」の用法は数量指示用法である。
 - スキヤニング考察が複数回行われ、その過程で総合的判断をし、程度を表す語句の集合の中から「ばかり」の上接する語句を選択する。この場合、「ばかり」の用法は高程度指示用法である。
 - スキヤニング考察が複数回行われた結果、複数のデキゴトが互いに時間的前後関係にあり、「ばかり」の上接する語句が唯一、完了／未完了のデキゴトだということにたどり着く。この場合、「ばかり」の用法は時間関係明示用法である。

四つに大別された「ばかり」の各用法の連続性は以下のようなものである。

まず、数量表現や程度を表す語句に「ばかり」が下接する時、一般には数量指示用法や高程度指示用法を表すが、文中に「ただ」などのような語句がある(例22)場合、「ばかり」が複数性明示用法を表す。この点は複数性明示用法と数量指示用法、高程度指示用法の連続性を示している。

(22) 夕霧は、ただ一行ばかりのお文に目をあて、心ときめかせた。(田辺聖子『新源氏物語』)

また、従来、歴史的用法の残存とされてきた「んばかり」の用例に、高程度指示用法として解釈できる用例(23)と時間関係明示用法として解釈できる用例(24)の両方が存在すること

は、高程度指示用法と時間関係明示用法の連続性を示している。

(23) いよいよ艶な女ざかりの風趣が、こぼれんばかりだった。(田辺聖子『新源氏物語』)

(24) 乳母車はからっぽになり、鉢にはあふれんばかりにピカンがたまっています。(カポージェティ『ティファニーで朝食を』)

つぎに、「動詞タ形+ばかり」は大きく時間関係明示用法に偏るが、例(25)のように「ただ」「たった」などのような語句がある場合や、例(26)のように否定や「か」が下接する場合など、つまり文中に統語的な環境条件が提示されている場合、「ばかり」は複数性明示用法を示す。

(25) この前は、ただ挨拶に来たばかりで、すぐに隆士と町に出て行ったから、ほとんど話をしていない。(三浦綾子『塩狩峠』)

(26) 第一部のなかに、私はいろいろ不満な点を発見したばかりでなく、第二部との関係からも、ある部分は改訂しておきたい気分が駆られていた。(山本有三『路傍の石』)

また、例(27)のように「動詞タ形」と「ばかり」の間に「と」が挟まれている時、高程度指示用法としても、時間関係明示用法としても解釈できる。例(21)「動詞ル形とばかり」でも同様に、高程度指示用法・時間関係明示用法の解釈が可能だった。動詞句を上接語とする例(25～27)や例(21)の様相は、時間関係明示用法と複数性明示用法、高程度指示用法の連続性を示している。

(27) 「あ、鳥飼君、いま、東京の警視庁の人が来て、君にあいたがっておられるよ」と、係長が待っていたとばかり、机の前から立ちあがって呼んだ。(松本清張『点と線』)

さらに、主に「形容詞+ばかり」の例文(上の例19)に見られる、「ばかり」の用法がどの用法であるかを判断に迷う例が存在することは、高程度指示用法と複数性明示用法の連続性を示している。

4.2 用例分布の特徴と用法の偏り

各品詞に下接する「ばかり」の用例について、以下に品詞ごとの分布を記した。

表3 各品詞の用例の分布について

単位：例

	複数性明示	数量指示	高程度指示	時間関係明示	二種類の 用法とし て解釈で きる	合計
名詞	2484	802	0	0	0	3286
動詞	880	0	378	1150	23	2431
形容詞	47	0	48	0	15	110
形容動詞	10	11	38	0	3	62
副詞	0	309	0	0	25	334
そのほか	6	0	0	0	7	13
合計	3427	1122	464	1150	73	6236

注：「ばかり」の用法が、二種類の用法として解釈できる用例では、「形容詞＋ばかり」「形容動詞＋ばかり」「動詞＋ばかり」の一部の用例を除き、他はすべて「とばかり」の用例である。

「ばかり」の用例では、「名詞（句）＋ばかり」と「動詞（句）＋ばかり」の用例が圧倒的に多く、両方を合わせ、「ばかり」の全 6236 例の 91.7% を占めている。「ばかり」の四つの用法の用例数から見ると、一番多く使用される用法は複数性明示用法である。また、「ばかり」に「で」「だ／である」が下接する場合、「ばかり」の表す用法は複数性明示用法に偏る。「ばかり」に「の」が下接する場合、「ばかり」の表す用法は、数量指示用法（「ばかり」が名詞句に下接する場合）と高程度指示用法（「ばかり」が動詞句／形容詞に下接する場合）に偏る。「動詞タ形＋ばかり」の場合、特殊な構文でない限り、「ばかり」の用法は時間関係明示用法である。「動詞テ形＋ばかり」の場合、「ばかり」の表す用法は複数性明示用法に偏る。このような用法の偏りは、「ばかり」節の文中での位置と、「ばかり」の上接する語句の形態が大きく影響していると考えられる。

4.3 課題の設定条件

本稿では、「ばかり」のすべての用法を、スキヤニング考察によって説明づけた。スキヤニング考察の課題は、必須条件と追加条件、特殊条件によって設定されると考えられる。

必須条件は、課題が「ばかり」の上接する語句についての質問であること、課題の述語は「ばかり」を含む節の述語部分を使用することである。また、課題の要点をなす疑問詞は「ばかり」の上接する語句の文中での意味によって、異なってくる。例えば、「ばかり」の上接する動詞が実際のデキゴトを表す時（上の例 9~11）、課題はデキゴトについての質問である。「ばかり」の上接する動詞が事物の程度を表す時（上の例 12）、課題は程度についての質問である。

追加条件は、必須条件だけでは課題を設定できない場合、生じる新たな条件である。つまり、課題の主語を、例文の「ばかり」を含む節の主語として設定することである。例えば、上の例（13）の課題は、「話題の人物はどの程度の巨漢であるか」である。また、発話時以外の時点のスキヤニング考察を要し、必須条件だけでは課題が設定できない場合、例文中など文脈に明示された時刻を参照時として連用修飾節の形で課題に組み入れることが必要になる。この参照

時も、追加条件の一つである。例えば、上の例(10)では、スキヤニング考察を要する時点は、「死体の発見された二十一日朝の六時半ごろ」である。よって、課題は「死体の発見された二十一日朝の六時半ごろ、列車は何をしたか」である。

特殊条件は、二つ考えられる。一つは、「ばかり」節が連体修飾節の場合に必要とされる。課題の構文が「ばかり」節と同じ構文環境をとるということである。例えば、上の例(6)では、課題は例文と同じ構文の「何人の下車客がプラットフォームに降りてきたか」である。もう一つは、例文に先行文脈がある場合、その先行文脈を連用修飾節として課題に組み込むということである。例えば、上の例(17)では、課題は、「腹がいっぱいになると、どのように事態を受け取っているか」である。

4.4 今後の課題

本稿では、「ばかり」のスキヤニング考察の内実について、文中・文脈において考えられるすべての要素を、視点に入れるが、最終的に認知的な処理の帰結となるのは「ばかり」に上接する語句であると考え。そして、このような認知的処理に基づく意味的特質を、「ばかり」の本質的な特徴とした。「ばかり」の本質的な特徴の応用、つまり、「ばかり」と「だけ」など他の限定の助詞の違いについて、「ばかり」の本質的な特徴を基盤に考えていくことが今後の課題の一つである。

「ばかり」の歴史的変遷と本稿で考察した各用法の連続性とのかかわりや、本稿で明らかにした用法分化と分布の偏りの総合関係に基づいた日本語教育への応用などが課題となる。これらの課題に貢献できることを期待し、研究を進めていきたいと考えている。

参考文献

- 小林可奈子(2003)「動詞に後接する限定の「ばかり」」『日本語・日本文化』29
- 定延利之(2001)「探索と現代日本語の「だけ」「しか」「ばかり」」『日本語文法』1巻1号
- 定延利之(2003)「現代語の限定のとりたて」沼田善子(他)(編)『日本語のとりたて—現代語と歴史的变化・地理的変異』くろしお出版
- 澤田美恵子(2007)『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』くろしお出版
- 高瀬匡雄(1997)「意味の“限定”と時間の“限定”」『立正大学国語国文』34
- 寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
- 中西久実子(1995)「取り立て助詞「ばかり」の限定機能—その複機能と単機能との連続性を中心に—」『大阪大学日本学報』14
- 中西久実子(2001)「単数のものをとりたてる「ばかり」の意味再考—教育の視点から—」『日本語と日

- 本語教育』第30号、慶応義塾大学日本語・日本文化教育センター
- 仁田義雄ほか(2009)「第9部とりたて」『現代日本語文法5』日本語記述文法研究会編、くろしお出版
- 丹羽哲也(1992)「副助詞における程度と取り立て」『人文研究』第44巻第13分冊、大阪市立大学文学部
- 沼田善子(1986)「とりたて詞」奥津敬一郎(他)『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- 沼田善子(1992)『「も」「だけ」「さえ」など—とりたて(日本語文法セルフ・マスターシリーズ(5))』くろしお出版
- 沼田善子(1992)「とりたて詞と視点」『日本語学』11-8 明治書院
- 沼田善子(2000)「とりたて」金水敏(他)『日本語文法2 時・否定と取り立て』岩波書店
- 沼田善子(2009)『現代日本語とりたて詞の研究』ひつじ書房
- 前田直子(2001)「「～したところだ」と「～したばかりだ」」『東京大学留学生センター紀要』第11号
- 野田尚史(1995)「文の階層構造からみた主題ととりたて」益岡隆志(他)(編)『日本語の主題ととりたて』、くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版
- 丸山直子(2001)「副助詞「くらい」「だけ」「ばかり」「まで」の、いわゆる〈程度用法〉と〈とりたて用法〉」『日本文学』95号、東京女子大学日本文学研究会
- 茂木俊伸(2002)「「ばかり」文の解釈をめぐる」『日本語文法』2巻1号
- 森田良行(1968)「ぐらい、ほど、ばかりの用法」『早稲田大学語学教育研究所紀要』7、早稲田大学語学教育研究所
- 森田良行(1972)「「だけ、ばかり」の用法」『早稲田大学語学教育研究所紀要』10、早稲田大学語学教育研究所
- 半藤英明(1998)『「限定」と「とりたて」の視座』『國語國文』第67巻第3号
- 張培(2011)「現代語ダケの諸用法について—『形容詞・形容動詞+ダケ』を中心に」『名古屋大学人文科学研究所』第40号
- 朱琳(2013)「現代語『ばかり』の用法の多様性について—動詞(句)+ばかりを中心に—」『名古屋言語研究』Vol.7
- 朱琳(2014)「現代語『ばかり』の用法の多様性について—名詞(句)+ばかりを中心に—」『名古屋言語研究』Vol.8
- 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』(2001)(庵功雄、高梨信乃、中西久美子、山田敏弘著)
- 『日本国語大辞典』第二版(2001) 小学館
- 『日本文法大辞典』松村明編 明治書院

用例出典

新潮文庫の100冊 CD-ROM版(昭和時代以降の用例を使用する)

*本稿は、筆者の博士学位論文の一部をなすものである。